

児童養護施設出身の 監督が描く、 “その先”の物語

RAILROAD SWITCH

レイルロード スイッチ

僕たちは、児童養護施設で育ち、今を生きている。

短編作品(20分)

大野ユウジ 加賀美秀明 小野島徹 (松竹芸能) 山本夢 (ユニオンエンタテインメント) 制作協力 青春事情

【STORY】 自らの生き立ちにコンプレックスを抱えている青年、和樹。彼は若手お笑い芸人として、厳しい芸能界の底辺でもがく日々を過ごしていた。そんなある日、和樹が出演していたお笑いライブに旧友の弘也がやって来る。彼は、和樹と同じ児童養護施設で少年時代を過ごした仲間だった…。思いがけない再開をきっかけに、和樹のアイデンティティは揺さぶられていく。



企画・監督 西坂來人 映像作家／絵本作家

1985年生まれ。福島県出身。少年期の一時期を児童養護施設で過ごす。現在は東京を拠点に創作活動を行っており、MV、企業向けVP、TV番組制作などの映像制作の他、イラストレーターや絵本作家としても活動中。劇団 青春事情、映像制作集団 Tokyo Cowboys に所属。2018年に監督した短編コメディ映画「The Benza」が国内外の映画祭で各賞を受賞。

RAILROAD SWITCHとは、鉄道の線路において線路を分岐させるポイントのこと。

この映画がきっかけで、少しでも多くの人に社会的養護の課題を知ってもらい、解決するための取り組みやサポートが拡充していくことを期待しています。

世界を少しでも変えるスイッチになりたい。タイトルにはそんな想いが込められています。

ひとりでも多くの方にこの映画を観て頂き、社会的養護やアフターケアの重要性を認知してもらうため、各地で『上映会&トークイベント』を開催しています。また、講演会のお誘いや、上映場所をご提供していただける方の募集も行っております。下記URLの公式サイトのお問合せフォームよりご連絡ください。

短編映画「レイルロードスイッチ」

YouTubeにて**全編無料公開中**

公式サイトよりご覧下さい → www.nishizakaraito.com



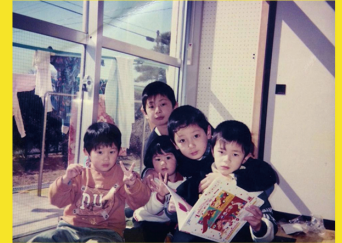
映画から知る、考える

社会的養護の現状と、その先の知られざる課題

社会的養護とは？

保護者のない児童、被虐待児など家庭環境上養護を必要とする児童などに対し、公的な責任として、社会的に養護を行う。対象児童は、約4万6千人。

里親や母子支援施設、グループホーム等があり、そのうち約3万人の子ども達が児童養護施設で暮らしている。

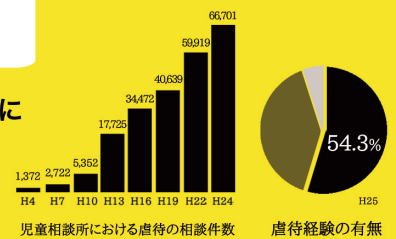


写真の一番上が監督の西坂(当時11才)。5人の兄妹が同じ児童養護施設で暮らしていた。

施設の児童の約半数が被虐待児

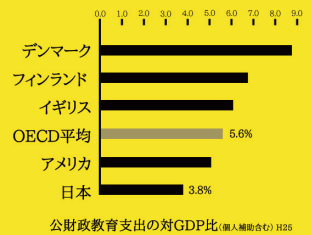
児童相談所における児童虐待に関する相談件数は、H11年度に比べ、H24年度には約6倍に増加。現在も右肩上がりに増加し続けている。(障がいのある子どもも増加傾向にある)

児童養護施設に入所している子どものうち、半数以上は、虐待を受けている。



少なすぎる予算、疲弊する現場

虐待を受けた子どもには十分なケアが必要とされるが、現場の職員やケアワーカーの数はまだまだ足りていない。職員は常に現場の対応に追われ、十分なケアが行き届かない現状がある。そもそも日本では、国から投下される子どもへの予算が先進国中最低ランクであり、社会的養護へ下りる予算も不十分。ケアを拡充するためには予算の拡大が必要である。



施設退所後の知られざる現状

児童養護施設の子供達は、学校を卒業したら施設を出て就職し、社会の一員となる。

しかし、家庭という基盤のない彼ら、彼女らはアパートを借りるための保証人もいない孤独な状況から社会生活をスタートさせる。病気や怪我で仕事を失ったり、トラブルに巻き込まれると、一気に生活が破綻し、路上生活者となってしまうケースもある。

犯罪に手を染めてしまうケースや、女性の場合は高い割合で性産業へ就いている現状がある。

また、虐待の後遺症や疾患を抱え、生き辛さを抱えながら暮らす人々も少なくない。



映画では、登場人物それぞれが児童養護施設を退所した後に、様々な悩みを抱えている。

私たちに出来ることがあります

社会的養護について話題にする、誰かに伝える。SNSやブログで意見を表明したり、記事をシェアする。

地域の子ども食堂や施設へのボランティアに参加。児童養護施設や、退所者をサポートする団体への寄付など。